

シンポジウム1

混合歯列期における口腔機能の成長発育の評価について

根岸 慎一

日本大学松戸歯学部歯科矯正学講座



<略歴>

- 2004年 日本大学 歯学部卒業
- 2010年 日本大学大学院 松戸歯学研究科修了（博士（歯学））
- 2010年 日本大学松戸歯学部 専修医
- 2015年 日本大学 助教（松戸歯学部・歯科矯正学）
- 2018年 日本大学 専任講師（松戸歯学部・歯科矯正学）
- 2019年 The Adelaide University 遺伝人類学講座 リサーチフェロー
- 2020年 日本大学 准教授（松戸歯学部・歯科矯正学）
- 2022年 日本大学 教授（松戸歯学部・歯科矯正学）

抄録

成長期の口腔機能は歯列形態の良好な発育と密接に関連していると考えられている。頬筋および口唇といった歯列の外側からの力系と、舌による内側からの力系のバランスが歯の位置決定に重要な役割を果たすというバクシネーターメカニズムの考え方は広く受け入れられており、これにしたがえば、歯列内外の力系の不均衡すなわち口腔機能の異常は不正咬合の発症リスクを高めることとなり、その早期発見は不正咬合の予防につながる可能性がある。

2018年には口腔機能に異常を認める疾患として口腔機能発達不全症が公的医療保険の対象となった。その診断基準も逐次更新され、当初は口唇閉鎖力のみが定量化項目であったが本年度の改訂では舌挙上圧もそれに加わった。しかしながらその他多くの口腔機能に関しては客観的評価基準が不足しておりその診断には困難を極めることも多く、臨床応用には多くの課題が残されている。

本講座では2012年より、口腔機能が歯列形態の成長に及ぼす影響を解明することを目的として、近隣小学校の児童を対象とした6年間の前向きコホート調査を継続している。同一児童の追跡調査項目として、最大咬合力、口唇閉鎖力、舌挙上圧、咀嚼運動、鼻腔通気度といった多岐にわたる口腔機能を包括している。さらに最新の調査においては、混合歯列期の咬合力測定に適したデバイスを導入し、小学校全学年児童を対象とした基準値策定を試みている。

本講演ではこれら一連の研究結果を、特に各口腔機能パラメーターの成長パターンや歯列形態の成長変化との関連性について焦点を当て詳細に報告する。特定の口腔機能と前歯部叢生発現との関連性について得られた重要な知見にも言及したい。

さらに、混合歯列期の矯正歯科治療の診断における口腔機能評価の重要性と、その臨床応用の可能性について考察し、口腔機能評価を取り入れた新たな治療アプローチの展望や、今後の研究課題について私見を述べたい。